

経団連弘報政策フォーラム昼食会における講演（抄）

（昭和五十四年九月十三日 経団連会館）

先般、私は解散を断行して、十月七日に総選挙をお願いすることにいたしました。これは、前回の選挙から三年近くの時日が経過していること、また、景気も回復軌道に乗ってまいりまして、今後も改善の兆がみられるようになってまいりましたことから、ここで総選挙をお願いいたしましたも、国民の皆さまに大きくご迷惑をかけることはなからうと考えたからであります。さらにエネルギーの制約、厳しい財政事情等、難局に立ち向かうためには、新しい体制と新しい決意でこの事態に対処する必要があるのではないかと考え、政局の一新を目指して、解散・総選挙という措置に出たのでございます。ますもって皆さまのご理解をお願いいたしたいと存じます。

七〇年代の試験を乗り切るに当たりまして、私どもは、大きな後遺症を一方の財政に残しているということをご想起していただきたいと思っております。海外援助の問題をはじめとして、あらゆる政策を実効ある姿で展開していく上には、どうしても財政の体質をここできちんとしておかなければならないと思うのでございます。私が大蔵大臣就任時に第一次エネルギー危機が発生し、これによる世界的不況の結果、わが国は三兆八千億円という思わざる歳入欠陥を引き起こす事態になりました。

このような状況であります。財政をさらに締めていくというようなことをやりますと、さなきだに深刻かつ大規模な不況の中にあつては、これはもう経済政策の領域を越えて一つの社会不安、政治不安を招くことになりかねないという判断から、政府といたしましては、とりあえず、この嵐は、財政で受けとめておき、そして昨日も今日も変わらないように行財政水準は手固く維持し、民間の回復力と相俟ちまして、経済の回復を進めていくという選択をいたしましたわけでございます。したがって、当時は財政の国債依存率が一パーセント程度でございましたものが、今日では四〇パーセントに近い国債発行量になっております。しかし、景気の回復とともに、国債依存率も引き下げていかなければならぬようになっておつたわけでございます。

去年あたりから手を染めようと思つたわけでございますが、まだ時期尚早であるといふようなこともあり、遠慮しておりました。今年度は、財政再建を始めるに於いての地ならしをやるついでに、この相当つましい予算を組ませていただいたわけでございます。

来年からいよいよ再建の一步を踏み出させていたどうかといつておられるのも、経済が回復した以上は、この懸案は、ともかく早いところ解決しておいて、八〇年代にわれわれが備えるところがなければならぬのではないかと考えたからであります。八〇年代にどういふ嵐が見舞ってくるか、どういふ衝撃を受けるか未知な中で、われわれは、それらに即応できる態勢をつくっておかなければならないのではないかといいうことと、これからあらゆる施策を講ずる上で、健全財政の支えがなければ、実効ある成果は期待できないのであります。われわれの政府を増税政権などと呼ぶ方もいますが、私としては、この大きな財政赤字

を五十九年度までに何とか解消させたい。それ以上無理なことを言っているわけではないのであります。一拳にやろうとしてしているわけではなく、来年から開始して五十九年度までにはこの後遺症だけは直させてもらいたいと考えているわけです。私も国民に負担を求めるようなことはせつないこととございますが、この財政インフレのこの過程を頭に置いて考えますと、国民に負担をお願いすることは決して国民に対する不親切ではない、と考えておるわけです。

しかし、その前に行政の節約、補助金の整理、公務員の整理、税制の見直し、不公正税制と称するものも徹底的に洗い、との声には大いに耳を傾け、洗い直しに努力しておるわけでございます。毎日毎日、私はもう各省を叱咤激励、ハツパをかけておるところでございますが、一口にそう申ししましてもなかなかこれは容易ではございません。行政整理については大体みんな賛成です。

しかし自分のところの問題になつてくると、ちょっと待てという。ほかでやってくれるのは非常に賛成だけれども、自分のところでやられることは非常に困るということになる。行政整理は総論みな賛成です。財政再建には行政整理が王道であるということと、あなたのところからまずやってくれぬかと言つと、それはちょっと待ってくれということになり、各論に反対の立場を示す。

総論は賛成だが、各論が反対だということは、できないことなのです。われわれは、何としても実のある成果を上げなくてはならず、一所懸命やっております。できるだけ財源を生かしてまいるように、むだを省くようにいたします。

幸いにも、経済も好転してまいりましたので、今年は、ある程度の自然増収が期待できるようにござい

ます。このままいけば来年も相当な期待が持てるかもしれませんが、十五兆円を超える国債、その中八兆円が赤字公債でございますけれども、それを自然増収分をはじめとして、これだけ縮減できる、従って財政は、再建の緒につきましたということが言えるようにしたい。これは、五十五年度の予算編成のときに、具体的な答えを出す以外にないわけで、いま鋭意検討してあるところでございますが、選挙を前にして明らかにならないのはずいと言われますけれども、これだけの金が足りませんか、これで間に合いますとか、足りない金はこつこつ方法でやりますとこつこつなことを申し上げる材料をまだもっていないわけで、これはしばらく待っていただきたいと思えます。

政府は、逃げ隠れいたしませんから、そのときにはきちんと言えを出しますが、いずれにしてもやる以上は、国民の協力を得なければなりませんから、協力を得られる方法で対処し、決して無理なことをいたすつもりはございません。ご信頼をいただき、ご協力を賜りたいものと思えます。